

瑩山禪師の二大誓願

善光寺住職 黒田武志

日本曹洞宗総持寺の開祖・瑩山禪師は、二十歳のとぎ、

「私は観音さまのように、この世の悩める人たちを、一生をかけて救っていきたい」と願う、

と願う、二つの誓願をお立てになりました。

一つは、この世が続く限り永遠に、道元禪師の教えを守り広げていくという『白法守護』の願。そしてもう一つは、虐げられていたり、社

会的にも低く見られていた女性を救おうとする『女人救済』の願です。

この二大誓願は一生護持されたものですが、お亡くなりになる直前にも、あらためてお立てになっていきます。これは、死んでしまえばもうそれで終わりというのではなく、禪師が、三世を貫く永遠の立場に住しておられた方だったからでしょう。



瑩山禅師像

白法守護の誓願

○ 宗派の成立と禅宗の登場

まずは、仏陀の本当の心を求める、ほつ発菩提心の願いである、『白法守護』の誓願を中心にお話しいたしましょう。

仏教には、それは数多くの経典がありますね。その説くところはさまざまで、互いに異なっていますので、すべてを読破して仏教を理解し安心を得ることは、とても難しいことでした。そこで、多くの中から、よりどころとなる特定の経典を選び出し、信奉することによって仏陀の真の意図を明らかにしようとする努力がなされました。そこから「宗派」というものが成立することになったのです。たとえば、『けこん華嚴経』を信奉する華嚴宗、『ほけ法華経』を信奉する天台宗、『三部経（無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経）』を信奉する浄土門……といったふうに。

ところが、ここに一つの批判が生まれてきました。「数多い經典の中から特定の經典をよりどころとするのでは、仏教を正しく理解することはできない。本当に理解するためには、經典の生まれいずる根源にさかのぼらなければいけないのである」と主張する宗派が現れたのです。

それが坐禪宗、すなわち禪宗でした。釈尊がお経を説かれるときは、必ず禪定に入られた。これが經典の生まれいずる根源である。だから、坐禪の修行によってこそ、心の本性が明らかにされ悟りが得られるのである、という主張だったのです。

○ 教宗と禪宗を統一させた道元禪師

さて、禪宗以外の諸宗派のことをひっくり返して、「教宗」といい、先にもいいましたように教宗は經典によって成立しているのです。「仏語宗」ともいいます。これに対して禪宗は、文字・言

語を離れ、心に依ることを重視するため、「教外別伝、不立文字」(悟りは、心から心に伝わるものであり、言葉によって書けるものではない)の立場から、文字や言語にとらわれることを極度に嫌い、それがこうじて、釈尊の説かれた經典までも軽視するようになりました。

そうした行き過ぎの禪宗のあり方に疑問を持ち、対立する教宗と禪宗を發展的に統一させた仏法を説かれたのが道元禪師でした。禪師は、禪宗と称するものは、「仏道をやぶる魔なり。仏祖のまねかざる怨家なり」「宗の称を立せん。如来の弟子にあらず。祖師の児孫にあらず。重逆よりおもし」(『正法眼蔵』仏道の巻)とまでおっしゃっています。かなり厳しいお言葉ですね。しかしその真意は、釈尊の菩提樹下における成正覚を頂点として、それに至る手だてとして説かれた經典は、すべて正伝の仏法そのものであり、一宗一派を分立することは許しがたいこと

であるというお気持ちだったので。

○ 宗旨を世に広げた瑩山禅師

道元禅師はいうまでもなく、曹洞宗の開祖ですが、この、曹洞宗^{ごう}という宗名が世に広がり、今日に至る大宗門となったというところに、実は、瑩山禅師登場の歴史的意義があるのです。道元禅師が、出世間的、脱俗的、理知的、学究的で、宗旨の確立に理想的であったのに対し、瑩山禅師は、世間的であり、情意的であり、実践的に宗門の開発に秀でておられました。つまり、道元禅師は創業の精神能力がこれ以上になく優れていた方で、瑩山禅師はそれを絶やすことなく、正しく大きく広げ続けていくすばらしい才能をお持ちの方だったということですね。

瑩山禅師は、道元禅師の宗旨・白法を守り、よく時代の流れに調和させ、広く大衆に行き渡らせました。しかし、大衆化したとはいっても、

正伝の仏法を水増ししたものではありません。他者を救おうとする大乘的立場に立った『只管^{しかん}打坐^{たざ}（悟りを求めたり、想念を働かすことなく、ただひたすら坐禅をすること）』の修行生活を自ら行いつつ、その禅風を社会に浸透させていったのです。その様子は、釈尊から永平二祖懷奘禅師に至る、仏祖の伝記と法の光の輝くさまを説き示した『伝光録』をはじめ、その他の著作でも明らかです。

○ 永光寺と総持寺の開創

このような瑩山禅師の教化伝道は、世の多くの人びととご縁をつくり、優れた後継者を育成するとともに、多くの寺を開創するというすばらしい事蹟を生み出していったのでした。

まずは、瑩山禅師が開創された永光寺についてお話ししましょう。

今の石川県羽咋市酒井町、当時の酒井保とい

うところに酒匂八郎頼親さかわけの はちろう ちかという地頭職かがおり
ました。その娘さんは、信州の海野三郎滋野信直なほの妻となりましたが、この娘夫婦は、瑩山禅師を深く尊敬し信じ、おすがりして、仏の道を日々熱心に学んでおりました。そしてついに、禅師にお入りいただくことを願ひ求めて、一寺を建立しようと発願し、正和元年（一一三二年）、禅師四十五歳の年の春、酒井保の山を禅師に寄進したいと申し出たのです。そのときの夫妻の言葉はまことにすばらしいもので、

「この山を寄進いたしますので、どうかここに居住していただきたい。寄進したからには、この場所がどんなに栄えようと衰退しようとも、また禅師がたとえ破戒僧になりさがろうとも、さらにはこの土地を他の誰かにお与えになりましようとも、いっこうにかまいません。私たちは、再び管領する気持ちはございません」
という、至誠あふれるものでした。

瑩山禅師は夫婦の心からの願ひを受けて、その翌年、正和二年、四十六歳の八月にここに茅屋を結んで庫裡（寺院の台所に当たる建物・住職の住むところ）として移られ、終生過ぐす地と定められました。

永光寺はこのようにして開創され、十一年後には禅苑としての規模が整うことになります。しかし、はじめてここにお移りになった頃は、茶湯に松の葉を煎じ、食器の代わりに柏の葉を用い、供養の施米を受けるときは小さなお碗を使い、修行の雲水は飯庫裡や方丈（四畳半ほどの住職の居室）で接待せざるを得ないほどの、きわめて質素な、乏しい物質生活の日々だったのでした。

永光寺が整備されつつある間に、一方では総持寺が開創されました。

それには不思議ないきさつがあるのでお話ししましょう。



永光寺と同じく能登国（現在の石川県）の鳳たけ至郡げしくんくしびのしやう櫛比しびのしやう荘しやうに、諸岳もろおか寺しやうという、行基菩薩の開基のお寺しやうがありました。ここは、五百年來、觀音菩薩さまをご本尊とした、庶民の信仰厚い靈場でした。

さて、このお寺の院主は、定賢じやうけん律師りつしといいましたが、元享元年（一二三〇年）四月十八日夜、（瑩山えいざん禪師ぜんし五十四歳の年）たいへん不思議な夢をごらんになりました。本尊の觀世音菩薩くわんぜいおんぼつさつが夢枕むせまくらに立たれ、こう告げられたのです。

「いま、釈尊の第五十四世でいらっしやる尊い人が、この国の酒井保の洞谷山（永光寺のある場所）に出世して、大いに仏の教えを説法されている。おまえは、すみやかにこの寺を、その聖者に譲り、永く仏法を發展させる道場にしなければいい。」

一方、それからまもない四月の二十三日の明け方、永光寺の禪堂ぜんどうで坐禪ざぜんをしておられていた

瑩山えいざん禪師ぜんしも、ふと、縁起のよい夢を感じられました。それは次のようなものでした。

觀音くわんおんさまが威嚴ゐげんのあるりりしいお姿で、手には未敷みぶきの蓮華れんげをお持ちになり、こつ然と現れ、「私はある一つの寺基を、師に与えよう」と告げられ、禪師を誘って古刹こせきの三門さんもんに連れていきました。そこでは、多くの人びとが、礼儀正しく出迎えています。禪師は思わず、「總持寺の二門、八字はちじに打開す！」（總持寺の家風けふうが世界に広まるであろう。）

と入門にゅうもんの挨拶あいさつを述べられました。その樓門ろうもんには、錦繡きんすいで装丁しやうていした『大般若經』六百卷ろくひやくけんが備えられており、その手前には放光菩薩ほうくわうぼつさつがまつられ、周囲には堂塔どうたつ伽藍がらんが美しく並んでおりました。

瑩山えいざん禪師ぜんしは、坐禪ざぜん中、夢からさめてしばらく感嘆かんとくしておりましたが、それから何日か日は流れていきました。

一カ月半ほどたった六月八日、瑩山えいざん禪師ぜんしは教

化の旅に出られ、諸岳寺の近くにもまいられました。その噂を聞いた定賢律師は、あの靈夢のお方はこの人にちがいないと確信し、一山の多くの人がとともに出迎えられました。話がたまにたま靈夢のことになり、二人の靈感がまったく符合していることに驚いた定賢律師は、夢のお告げにしたがつて、一山をあげて献上することにしたのです。申し出をこころよく受けられた瑩山禪師は、夢で唱えた法語にちなんで、寺号を「總持寺」、山号を「諸嶽山」とし、律院を禅林に改めて、さかんに教化活動を展開されることになったのです。

○ 瑩山禪師の強い決意

ことしより 八幡やわたの神かみの あらはれて
わが立つたぎ杣まの 守まもとなるかな

われ棲すむと 那坂なさかの山やまも 踏ふみならし
苔けのしたきて 人ひとぞ訪とひ来る

この二首の歌は、瑩山禪師のお詠みになられたもので、『太祖常済大師御詠歌』第一番・第二番になっていきます。その解説をみてみましょう。「ことしより…」という最初の歌は、禪師が五十五歳のときの作で、あの、夢のお告げのことを詠まれたものだと言われていきます。八幡の神とは、仏法守護の神、八幡大菩薩のことでしょう。禪師は、この神さまの応援をととても喜んでおられるのですね。

前にも述べましたように、永光寺を開創してから永い間、貧しさに甘んじて仏道修行に励んでこられましたから、それを見ていた八幡大菩薩が応援してくださったのです。その応援によって、仏法がこれからますます勢いさかんに栄えていくであろう兆しがはっきりしたと禪師に

は思われ、その悦びの気持ちを歌に表したのでしょう。「わが立つ杣」の杣とは、樹木を植えつけて材木を採る山のこと、「守」とは「まもり」すなわち守護のことです。

「われ棲むと…」という二番目の歌は、最初の歌を詠まれた翌年、五十六歳六月四日、やはり、夢に關したことを歌に詠んでおきたいという思いで作られたものようです。歌の意味は、われ棲むと——（私がこの寺の住持として仏の修行を行っていることを、世の人びとも知っていることであろう）、那坂の山も踏みならし——

（那坂はさかまく波のこと。さかまく波のように険しく起伏の激しい山をも踏みならし、デコボコの山路が平らになるほど、次から次へと参禅問法の人が訪ねてくる）、苔のしたきて——苔いっぱいの山路もいとわず大勢の人びとがやってきて、私の道場で修行に励んでくれる。これはまことに仏法の興隆である）ということであ

りましょう。

この歌のあとには、「ここを以て、子孫絶やすべからず。道人相続して、来際寺院興行。仏法断絶すべからず、これを知れ。後鑑のためにこれを記す」と書かれています。仏法の興隆を法孫たる者、決しておろそかにするでないぞ、ゆめゆめ断絶あるべからず、という瑩山禅師の心が表れています。「これを知れ」という命令形の強い言葉にも、断固たる決意のほどが感じられますね。

○ 達成された『白法守護』の願

さて、白法守護に燃える瑩山禅師の名声は、いち早く中央地方に広まりました。当時の天皇・後醍醐天皇のお耳にも伝わりました。やがて天皇から十種のご質問がくだり、それに対する瑩山禅師の奉答がたいへん深く天皇のお気持ちにかなっていたので、元享二年八月二十八日、

天皇の意を伝える書・りんじ綸旨を賜り、総持寺は日本曹洞宗賜紫出世の道場となるのです。綸旨の要旨は次のようなものでした。

「能登国の諸嶽山総持寺は、中国の曹溪山、六祖大鑑慧能禪師の正しい法灯を継いで、それより洞山良价禪師に伝わる曹洞禪の奥深い道理を広く世の中に明らかに示してきた。それゆえとくに、日本に二つとない禪苑であるので、『曹洞宗出世の道場』として補任する」

この綸旨の下賜については、歴史的事実として疑義もあるとされますが、永い宗門史においては、総持寺はこの綸旨によって出世道場として一宗の本山たることが認められ、同時に総持寺を中核とする宗団が正式に「曹洞宗」と称するようになったと伝承されています。

それが今日の大宗門となったのであり、瑩山禪師の二大誓願の一つ『白法守護』の誓願は、めでたく達成されたのです。

女人救済の誓願

○ ご母堂の願いを受け継がれて

次に、『女人救済』の誓願について申し上げます。先ほども述べましたように、瑩山禪師は非常に世の中の多くの人びととのお縁が厚く、とくに女性に縁深いお方でありました。

女性を救いたいというお心の根源となっているのは、禪師の母・懐観大姉の感化でした。この母君に向ける、ご恩への感謝の思いが、広く世の女性の悟りの心の開発へとつながっていくのです。

禪師五十一歳のとき、加賀の浄住寺にいらっしやった母・懐観大姉が八十七歳でおかくなりました。

その臨終の枕辺でのご遺言、

「女性というものは、苦勞の多い運命に定められて生涯を過ごさなければなりません。どうぞ

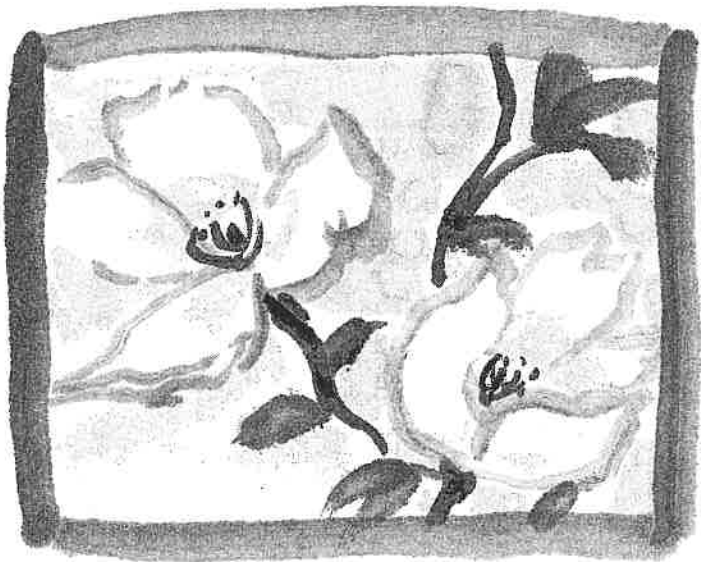
薄幸の女性のために、本当に幸せになることのできる心の支えを与えていただきたい」

このお言葉が、心にしみ込んだのでしよう、男尊女卑の風潮はなほだしい当時、瑩山禪師は思い切ってこの悪い慣習を打ち破り、『女人救済』の願をお立てになったのです。

○ 女性の心を尊重

母・懐観大姉が亡くなった翌年、瑩山禪師五十二歳の年の八月六日、前にも述べた、永光寺開基・滋野信直夫人が永光寺にきて、出家得度したいと禪師に求められました。禪師は一時は躊躇しましたが、夫人の決意の固いことを知り、また、

「昔、永平高祖が中国から戻ってきて、京都の建仁寺にいらっしやったとき、私の祖母・明智優婆夷^{うぱい}を得度してくださったことがあります。私はゆうべ、このことを夢にみて、なつかしい



思いでいっぱいになりました。そんな翌日にこうしてあなたが出家を求めていらした。もしかしたら、あなたは祖母の再来かもしれませんね」

といわれ、得度式を挙げられ、尼となった夫人を「黙譜祖忍」と名づけられました。

それから三年後、禪師五十五歳の年の六月十八日には、洞谷山下の勝蓮峰に「円通院」を建立し、これを祖忍尼に与えて、修練の地とされましたが、このときの様子を『洞谷記』に沿ってお話しましょう。

禪師は祖母・明智優婆夷と、悲母・懷観大姉の遺徳を慕って、ゆかりの十一面観音を円通院のご本尊としておまつりしました。あわせて禪師の頭髮とへその緒を白蠟の筒に収めたものを観音像の台座に入れて。そして、黙譜祖忍を寺の住職としました。禪師は、この円通院をお守りするため、母君の終生の念願だった女人済度の誓願の成就を祈る寺とされたのです。

祖母のために円通院を建て、開基・黙譜祖忍尼の道場とし、また、母のために宗門最初の尼寺「宝応寺」を建てて、明照尼を最初の房主と定め、その後継者は尼僧の中から選ぶようにいわれました。出家することもなかなか許されなかつた当時の女性にとっては、すばらしい心の支えができたことでしよう。

これらは道元禪師の男女平等、女性尊重思想の実現であるといわねばなりません。

「ひたすらに かける願いは あらたかや

玉の台に 紫の雲

南無常済大師 南無常済大師

この、『太祖常済大師御和讃』にも表れているように、瑩山禪師の、ひたすらな、ただ一筋の誓願は、あらたかな靈験となって、今日の大宗門を形成するにいたったのです。

日本國北陸道能登

掃比庄諸岳觀音堂者

行基菩薩建立也當庄最功

伽藍而 觀世音菩薩

靈驗無雙道場也草創年舊

緣記紛久然而右老相傳云

行基建立浮屠語傳行基亦

立伽藍必雀不巢比堂自古雀

不巢誠知行基建立靈場耳

於是予又不求受當寺請而

與行禪法干時元亨元年

四月廿三日晚天在國國酒井洞谷而

感瑞夢當寺本為教院改欲為

車

自王后將相悉皆屏之祈請

產生平安當庄姬婦可祈之

靈驗必可揭焉矣為後鑑

記之諸人同心合力立當寺

山門仰國通復應至禱至禱

如受難記尚以猶務同十六日赤原重告云
昨夜四壁同桂山神光臨當庄

元亨元年六月
與性又山門行門是山門為國通禱也

十七日託禱而披露

諸岳山松持寺中興沙門

釋迦牟尼佛立十四世佛法

瑩山 紹瑾記

瑩山 紹瑾記

瑩山禪師真筆・總持寺中興緣記

大本山総持寺・二祖峨山紹碩禪師が書かれた『総持寺開闢縁起』には、

「総持寺は観音大士の霊場として、その大士の靈驗あらたかなること、たとえるにものなし。ひとたび大士に祈願するところあれば、難産も立ちどころに除き、死児の命もただちによみがえるべし殊に霊場の当主・瑩山禪師は、釈尊五十四世の法孫にして、よく仏家の正法をつぎ、声誉はなはだ高し、さきに奏対するところの十種の法語は誠に得難き演法なり。この希有の霊場、この大禪師の居住所は挙げて皇運無窮の祈願所となると。日本曹洞宗第一の道場というべし。」

とあり、総持寺が仏の偉大なるお力の著しい道場であることが述べられています。私どもが、自分の利益になることだけを考えるのではなく、まごころを持って祈願すれば、その祈りは

伝わり、ただちに聞きとどけていただけるとう、ありがたい大本山なのです。

現在、総持寺は、横浜の鶴見に所在地が移りましたが、鶴見の本山からは、西の方に富士の霊峰を仰ぎ見ることができ、前には大いなる太平洋を見下ろすことができます。鶴見ヶ丘には、五十余棟の堂塔伽藍が建ちならび、まさに「玉の台に紫の雲」そのまま、瑩山禪師の偉大な誓願力の結実に目をみはるのであります。